

令和7年度

ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和7年10月26日（日）

第2回『東連地の里めぐり』

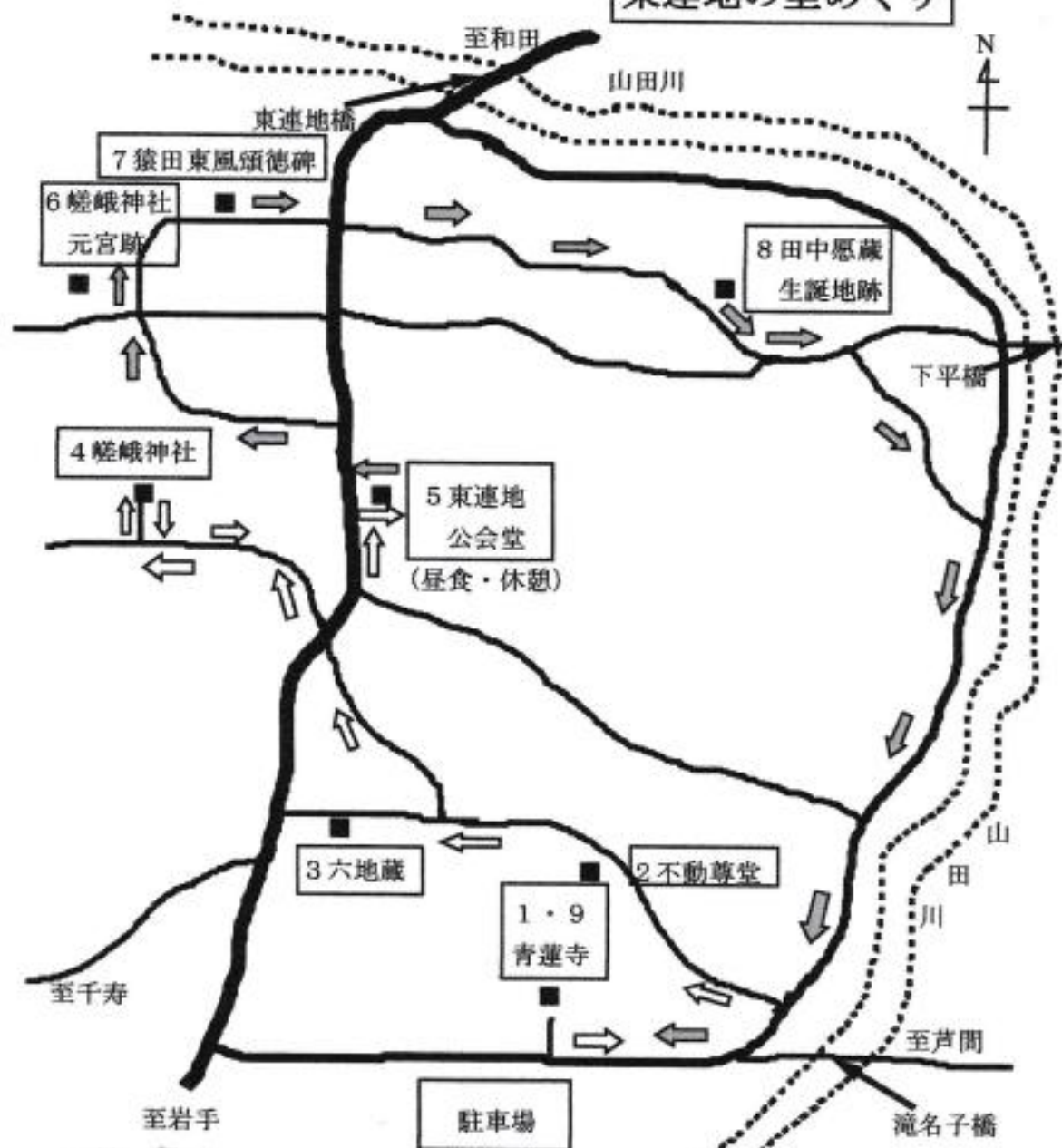


青蓮寺本堂

常陸太田まちかど案内人の会

常陸太田の歴史散歩探索コース 10月26日(日)

東連地の里めぐり



<日 程>

- | | | | | | |
|--------------|---|-----------------|---|-------------|---|
| 1 青蓮寺 | ⇒ | 2 不動尊堂 | ⇒ | 3 六地藏(東連寺跡) | ⇒ |
| 9:30-10:30 | | 10:50 | | 11:15 | |
| ⇒ 4 嵯峨神社 | ⇒ | 5 東連地公会堂(昼食・休憩) | ⇒ | 6 嵯峨神社元宮跡 | ⇒ |
| 11:40 | | 11:50-12:30 | | 12:50 | |
| ⇒ 7 猿田東風頌徳の碑 | ⇒ | 8 田中愿蔵生誕地跡 | ⇒ | 9 青蓮寺 | |
| 13:10 | | 13:40 | | 14:10 | |

ふるさと常陸太田の歴史散歩

『東連地の里めぐり』

日 時 : 令和7年年10月26日(日)

コース

- | | | |
|----|----------------------|-----|
| 1. | 青蓮寺 | 1 |
| | 豊後の国二孝女物語 | 2~3 |
| 2. | 不動尊 | 4 |
| 3. | 六地藏 | 4 |
| 4. | 嵯峨神社 | 5 |
| | ———— 昼食(東連地公会堂) ———— | |
| 5. | 嵯峨神社元宮跡 | 5 |
| 6. | 猿田東風頌徳碑 | 6 |
| 7. | 田中愿蔵の生家跡 | 6~7 |

1. 青蓮寺 東連地^{しげ} 繁

皇跡山青蓮寺 浄土真宗

本尊：阿弥陀如来立像

東連地^{しげ}繁の地は、昔、天武天皇が清見原親王であったころ、天智9年（670）から天智11年（672）まで跡を止められたところで、帰還後その殿上に仏像ならびに上宮太子^{じょうぐう}の像を安置した。のち、五百余年を経て、後鳥羽院第二の宮周観上人がこの地に下向されて、王跡山極楽院瑞巖寺と号し、天台の法流を伝えた。

畠山重忠の第二子重秀は、重忠が殺された元久2年（1205）に出家して、梅尾明恵上人^{のお}の弟子となり、恵空と号した。父の墓をたずねて常陸の国に巡ってきた時、たまたま当山の太子堂に泊って太子の夢をみ、太子のお告げに感じて親鸞^{とが}の弟子となり、法号を性証^{しょうしょう}と改めた。親鸞に従ってふたたび当山を訪れた時、太子堂をはじめ、境内がひどく荒れはてていたので、建保6年（1218）に師弟力を合わせて境内を浄め、堂宇を建てて浄土真宗（一向宗）の寺とした。ここに住むことになった性証は、青蓮の夢をみてのち、寺号を青蓮寺と改めたという。

寺領は、825歩（2722・5平方メートル）であった。現在の建物は、江戸時代のもので、仏壇のある部屋は、寝殿造りの流れをくむめずらしい造りとなっている。壇上には、本尊阿弥陀如来像と性証上人の坐像とが安置されている。性証上人は、親鸞の二四輩第八番である。

本尊 木造阿弥陀如来立像（県指定文化財）

青蓮寺の本尊である木造は像高 53.5 cm、光背も含めると 102 cm、檜材の寄木造の立像で、鎌倉時代の後期の作（中染阿弥陀堂の鉄造阿弥陀如来立像とほぼ同時期）と考えられている。整った顔立ちや流麗な衣の線など、とても美しい像だが、両手が手首から先が失われているため、元はどのような印相であったか明らかになっていない。

参考文献：水府村史

集中幕僚資料



木造阿弥陀如来立像

「豊後の国二孝女物語」

病父を訪ねて 300 里 ～豊後国の二孝女物語～

これは、今から 200 年も昔の江戸時代の話だ。

豊後国(ぶんごのくに)臼杵藩(うすきはん)野津郷(のつのごう)泊村(とまりむら) (現大分県臼杵市野津町)の川野初衛門(かわのはつえもん)は、お寺参りの旅に出たまま 7 年も行方知れずになっていた。

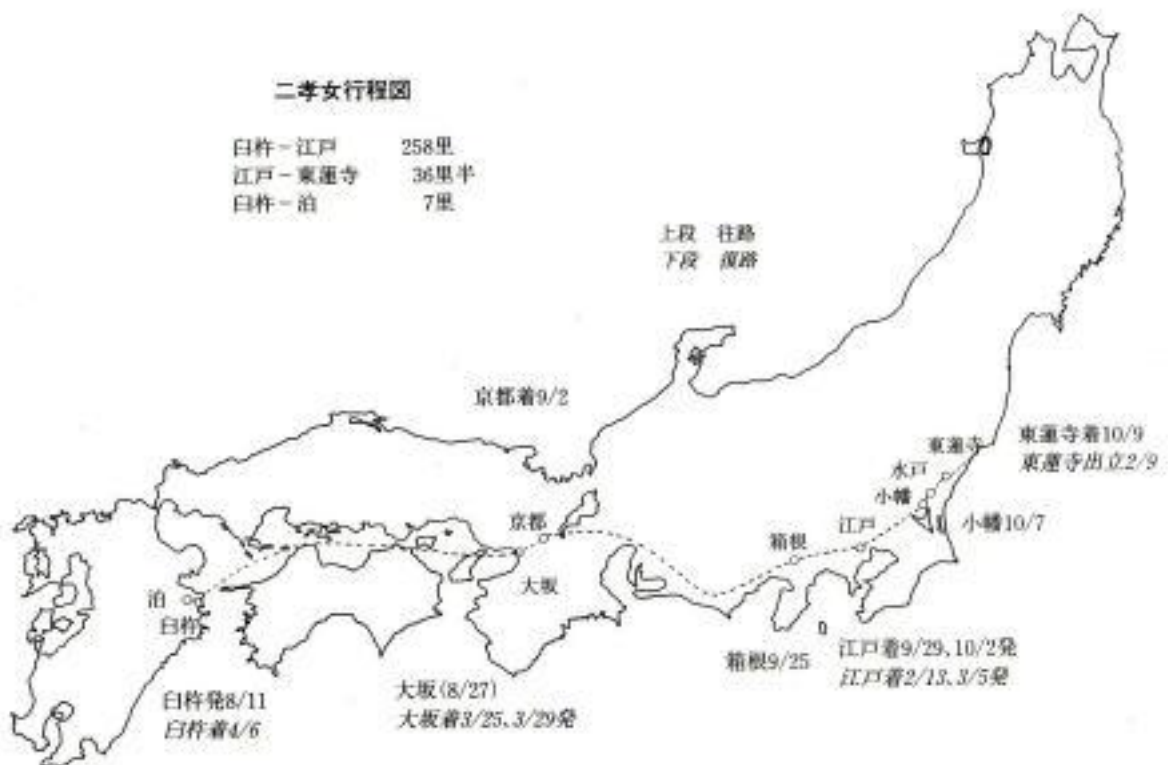
実は、初衛門は旅の途中に東蓮寺村(とうれんじむら) (現常陸太田市東連地町)の青蓮寺(しょうれんじ)にたどり着いた時、病が重くなり歩くことができなくなってしまい、青蓮寺や地域の人たちが世話をしてくれていた。

そのような時、京都の西本願寺で青蓮寺の住職と豊後の善正寺(ぜんしょうじ)の住職が会って初衛門が生きていることが分かる。その話を聞いた初衛門の娘(ツユ 22 歳、トキ 19 歳)は、遠く 300 里(約 1200 キロメートル)離れた青蓮寺までお父さんを迎えに旅に出た。

旅に出ると言っても、現在の旅行とは違い、船や歩いて 2 か月かけての旅。まして、若い女性が 2 人なので命がけの旅だった。この姉妹に心を動かされた地域の人々だけでなく、水戸藩なども支援してくれた。そして、次の年の春に、無事にふるさと豊後国へ親子 3 人で帰る。



・二孝女行程図



・二孝女関係書簡（青蓮寺蔵 常陸太田指定文化財）

二孝女の話は、臼杵市では長く語り継がれてきた。しかし、常陸太田地方では忘れられ、伝承されてこなかった。

平成 17 年秋に、青蓮寺で偶然に長持の中から書簡類 17 通が発見されたことで、二孝女物語の史実が明らかになってきた。書簡の差出人は、ツユ・トキ姉妹、臼杵藩江戸屋敷留守居役、善正寺住職のもの。

現在、常陸太田市指定文化財に指定されている。

・初衛門の庵の跡

1804 年（文化元年）、初衛門は、知人に誘われ、浄土真宗の開祖親鸞上人の遺跡巡礼の旅に出ました。ところが旅の途中足の病となり、青蓮寺にたどり着いたときには歩くことができなくなってしまいました。青蓮寺の住職証吟夫妻は、初衛門の病状を心配し、しばらくの間面倒をみることにしました。

しかし、足の痛みは回復するどころかむしろ悪化し、日常生活も困難なほどにひどくなってしまった。もう臼杵に帰ることは不可能だと考えた住職は、境内に一室を作って寺で生活させることとした。

その後、住職の妻をはじめ寺男まで寺中の人たちが、初衛門の世話をしてくれた。また、村の郷医である猿田玄碩は無償で治療にあたった。村人たちも見舞いに訪れ、食べ物やお金を置いていく者もいた。

このようにして、初衛門は、7 年の月日をこの場所で過ごすこととなった。

・豊後国二孝女の碑（青蓮寺境内）

この碑は、「二孝女顕彰会」によって、平成 22 年 10 月に青蓮寺の境内に建てられた。

題字は、大久保 太一常陸太田市長

撰文は、秋山 高志先生

書は、小川 聖世先生

参考文献：旧山田小ホームページより

2. 不動尊堂（お不動さん）

本尊は、全身火炎につつまれ、右手に降魔の剣、左手にけんさく羂索というふんど鍱（綱）をもち、忿怒の形相をした石像の不動明王像で、悪魔・煩惱を降伏させるといわれている。創作年代は不詳である。

修験者の守り本尊と仰がれ、修練に格好な幽寂であるこの地に祭祀されている。

祭礼は、旧暦6月27日の宵祭り、滝名子班内の信仰が続いている。

参考文献：水府村史



3. 六地藏堂 東蓮地 繁

東蓮寺繁の地蔵屋敷に、六地藏がある。振分地蔵を中央にはさんで、堂内に六体の地蔵菩薩像が横に並べて安置されている。いずれも、高さ6、70センチメートルほどの簡素な感じのする石像である。

六地藏とは、六道を輪廻転生する衆生の苦患を救うという地蔵のことで、各体の呼び名は、出典や像形くげんの持物によって諸説がある。奉納

額によると、金剛願地蔵・金剛宝地蔵・金剛悲地蔵・金剛幢地蔵・放光王地蔵・預天賀地蔵のことであるという。同地に居住し、代々産婆を業としていた市川家が古くから管理していたが、故あって、六地藏はしばらくの間岡坂の墓地に安置されていた。

昭和のはじめごろ、近郷近在の信仰者の喜捨によってもとの土地に堂が建てられ、六地藏も復歸した。賽の河原で、地蔵が子どもを庇護するということから、安産の祈願とともに、亡くした子どもの成仏を願ってひところは厚く信仰され、線香の絶えることなくにぎわいをみせていた。

参考文献：水府村史



4. 嵯峨神社 東連地 繁

祭神 ^{やちほこのかみ}八千戈神 ^{おおなむちのみこと}(大己貴命の別称)

平安時代中期、後三年の役（1083～87）の時、陸奥の国、金沢の柵（秋田県横手市）で苦戦している八幡太郎義家を弟の新羅三郎義光が官を辞して応援の途中、この山上で旅の疲れを休めながら、遠い地の面影を偲び、安否を気づかったという。そのためか、地元の人びとは



は義光の心情をおもいやり、いつしかこの山を面影山と呼ぶようになったという。上東連地村大石沢山にあった嵯峨神社は元禄九年（1696）徳川光圀によってこの面影山に遷座され東連地村・芦間村の鎮守とした。祭神は^{やちほこのかみ}八千戈神 ^{おおなむちのみこと}(大己貴命の別称)である。きざはし（石段）の中腹にシイの大木がある。樹齢は定かではないが、北限の群生地としてはめずらしいものと思われる。

参考文献：水府村史

5. 嵯峨神社元宮跡 東連地 山根

碑文によれば、天喜5年（1057）陸奥守鎮守府將軍源頼義が安倍貞任・宗任兄弟征討のため奥州へおもむく途中、この地に露營をし、戦勝を祈願して嵯峨神社を大石沢山に創建したと伝えられている。

その後、百余年を経た^{じしやう}治承4年（1180）右兵衛佐源頼朝が西金砂山城に籠る佐竹冠者秀義を攻めた時、佐竹の武将千葉忠常が前線防衛のため、沿道の人家に火を放って焼いた。



その余炎をうけ、社は礎を残すのみとなったという。

信仰厚き地元民が社を再建し、祭祀を続けてきたが、元禄9年（1696）徳川光圀は源氏の後裔としていたく感じ、源氏ゆかりの高台の地、面影山^{うつ}に遷した。後年になって地元有志により、大石沢山の一角に稻荷熊野明神が祀られ神灯消えることなく、本宮として保存されている。

参考文献：水府村史

6. 猿田東風^{さるたとうふうしょうとく ひ}頌徳碑

猿田東風、本名は只介・好史^{よしふみ}ともいう。東連地の生まれで、畠山道隆・山田倉太郎など知名の師について、漢文・漢詩・国史・国文・和歌などを学び、東風と号した。師匠の松籙庵鳳瑞の勧めによって、四世曲直庵の嗣号を受け、宗匠として俳句の選評にあたった。明治40年(1907)12月、私立弘^{こうしょう} 敝義塾を設立し、以来30年間、子弟の教育に力を尽くした。その薫陶を受けた者、実に二千余に達したという。

大正10年(1921)、門下生たちが相諮って頌徳碑を建て、師の徳に報いた。また、村の行政にも尽力し、山田村消防組頭・山田村農会長・山田村長その他の要職を歴任し、昭和34年(1959)2月18日、84歳で没した。



参考文献：水府村史

7. 田中愿藏^{たなかげんそう}の生家跡

最近になって、愿藏の後裔である猿田裕氏（水戸市在住）が生誕地を後代に残そうと、りっぱな自然石による碑を建立した。碑文によると、愿藏は、弘化元年（1844）3月18日、猿田玄碩^{げんせき}の五男として東連地のこの地に生まれる。その先は佐竹の臣猿田豊後守である。父玄碩は徳川齊昭に見出され、藩医^{げんせき}となり、常に側近として奉仕する。

弘化2年、愿藏2歳の時、水戸紺屋町の下屋敷に移る。嘉永2年（1849）正月、愿藏6歳の時、父に連れられて原忠寧（一橋慶喜の側用人）の宅に預けられ、その主宰^{せい が じゅく}する青我塾にはいる。のちに弘道館に学ぶ。さらに出府して昌平^{しょうへいこう} 黌に学び、時の儒官安井息軒に師事する。

文久2年（1862）19歳、学成りて帰藩し、ただちに藩命により藩主烈公の建てた野口時雍館^{じようかん}（旧御前山村）の館長になり、子弟の薫育に従事する。

愿藏は早くから尊王倒幕の志を抱く。元治元年（1864）2月同藩典医田中秀貞の養子となり、姓を田中と改める。養家に行く暇なく天狗党に走り、元治元年3月藤田小四郎とともに筑波山に挙兵する。のちに藤田と議合わず、別に一隊を率いて幕府兵

と戦った。緒戦は華々しく軍を進めたが、利あらず敗れた。八溝山に至り再挙を図ろうとしたが、糧食尽き、10月1日やむなく兵を解いた。

一人八溝山麓真名畑の菊池弥平宅に宿泊したが、後難が同家にかかるのを懸念し、自ら塙代官所に出頭して縛につき、10月16日塙の久慈川畔において処刑される。時に21歳。

絶命の辞 霜に染む樹々の梢の錦より
いと珍しき谷の松が枝

刑死の地塙の安楽寺には墓碑が、刑場跡には碑が、故塙町長金澤春友翁の尽力により、建立された。日月時去りて涕の滅するをおそれ、碑を建てて愿藏生誕の地と史実の一端を刻すと記されている。幕末時代の混乱した世相に想いを馳せ、生誕地の碑前にただすみ、明治維新夜明けの4年前に散った。郷土の生んだ若き熱血漢愿藏の面影を偲ぶのみである。

参考文献：水府村史



田中愿藏 生家

写真提供：瑞龍町 森田弘道氏より（1974年 撮影）